

昭和十二年度

清水先生を師範に迎える

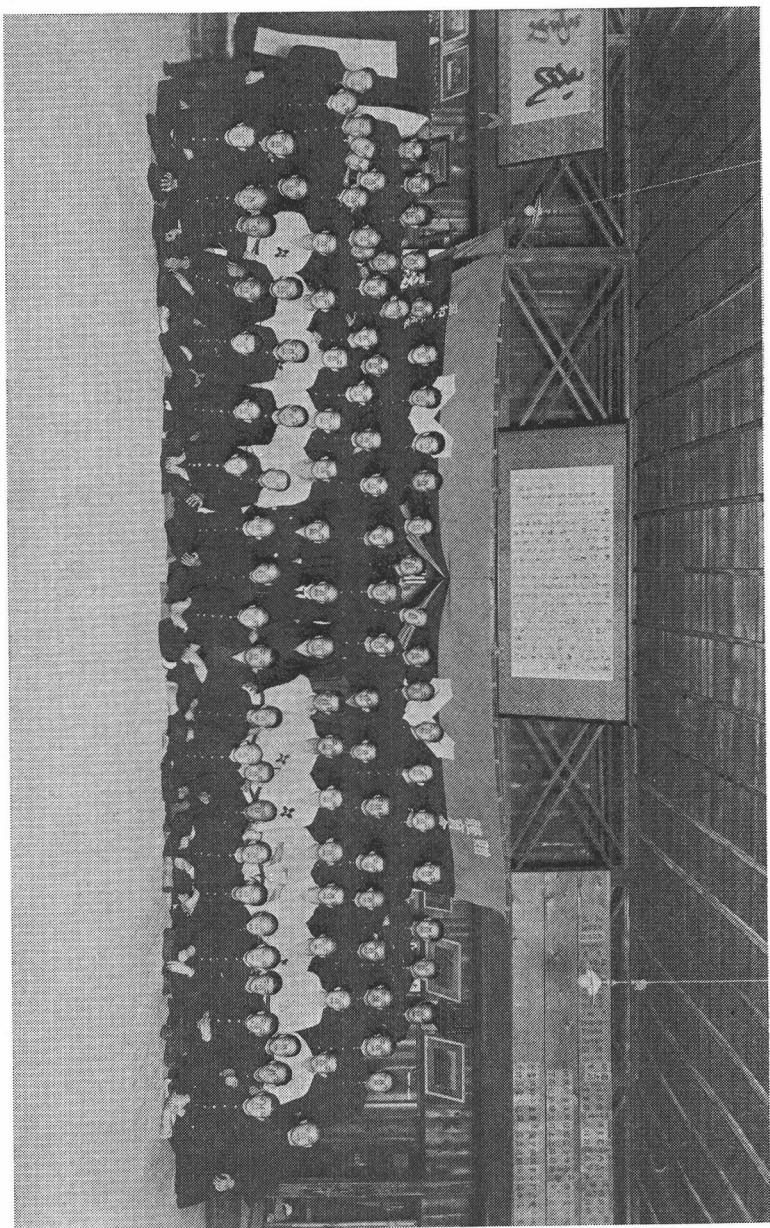
熊谷 喜徳

「突然、なんの前ぶれもなく慶應の学生が二人現われ、塾の柔道部を見ろという話で見えられましてね……」と先生はその日のことを述懐されるのである。突然に現われ先生を驚かせた二人の学生の一人は当時主将をしていた古屋君で、もう一人が私だった。

先生はこの四十年前の出来事を、つい昨日のように今でも鮮明に記憶されていた。先生と塾柔道部との長いおつき合いの歴史がここから始まつた。昭和十三年の二月半ばの事である。二人の塾生は先生を驚かざるを得ない真剣かつ思いつめた氣持でお訪ねしたのである。

その頃の柔道部は、飯塚先生を師範に、中野先生もお元気でおられたが、師範はご年輩そして中野先生も足腰を病めておられ、新しく実力・人格兼ね備わった師範を搜し求めていた。後で触れるが、戦前の日本の柔道界における塾と早稲田両校の占める役割りは、現在と比較にならない大きさを持つていたものである。その試合後の反省と結果から、師範、中野先生、そして五島、沖、今川先輩、古屋君、近藤君、小西君、田岡君、そして私などがよりより協議検討の末、塾の柔道部師範に相応しい人物は清水先生をおいてない、という結論を出したのであつた。

塾の柔道部氣風として、ただ強いだけでなく、指導者としての識見と人格が兼備されていることを第一義としてい



昭和十二年卒業生送別大会記念

たので真剣な議論と選考を重ね、先生に白羽の矢が立てられ、是が非でも先生を師範にお迎えすべしという、大変責任の重い使者の役目を二人が背負つたのであった。

先生は突然びっくりされた訳であるが、「一人にとつては、正に当つて砕けるとばかり前後の順序もなく、なにがなんでも、『よし引受けよう』というお言葉を得るまでは帰らない、いや帰れない悲愴な覚悟で出掛けたことを覚えている。この時、どんなご挨拶をし、どんなお願ひの言葉を申し上げたか覚えていないが、ひと通りお話をしたあと先生は、日体の仕事の他、他校や会社の柔道の指導をいくつか持たれしており、とても引受けられないことで私達の申出を最初は断わられただけは今も確かに記憶しているものの、さて、そのあとどういう経過で「週一度なら」というお約束をいただけたのかまるで覚えていないのも、その時の大任を果たせたことの嬉しさで消し飛んでしまったのに違いない。ともに角にも一人とも感激とこれで先輩に言い訳が立つと思う安堵で一杯だったのである。

このような大任を果たした一人の浮き浮き気もそぞろな気持ちとは正反対に、先生はこんなことまで覚えておられた。「古屋さんと熊谷さんが帰つて行かれる後ろ姿を見て面白い歩き方をなさるな……」と、今度この原稿のためお話しを伺つた折、二人が左右の肩をこんなに同じように傾けながら歩く姿が印象に残つた、と身振りをされながら話しきされたものである。

今こそ(年の故だらうが)憶面もなく、『実力も人格も兼ね揃つておられる……』などと先生の前でお話しできても、当時はどんなにしゃちほこばつて、塾柔道部の代表として興奮しながら口説いたことであろう。余談になるが、一緒に行つた古屋君とは昭和十三年卒業と同時に王子製紙に入社し背広も同じ背丈格好もよく似ていた故か、上司に私が古屋になり、古屋が熊谷と呼ばれる位の仲であったので、先生が歩き振りがまったく同じなので印象的だったと話しをされるにつけ、若くして戦争で亡くしたよき友を懷しく思い出されて仕方がなかつた。

さて、一度は先生の現況が許されないとして断わられながらも、先生は、講道館での飯塚師範、中野先生を知つておられたことや更に松本中学時代、五島三雄キャプテンが率いる塾柔道部の遠征で稽古したこと、その稽古で沖先輩の足払いの素晴らしい技に魅せられたことなど以前から塾柔道部に親しみをもつて居られたらしく、私共の下手な口説きにもかかわらず、お引き受け下さったものと思われるのである。

師範の就任を前に飯塚、中野両先生へのご紹介にご案内申し上げたが、その時の塾の柔道部の氣質というのか気風の印象をこんな風に語られている。

「三田のどこかで阿部さん達とお話しをして、飯塚先生にお目にかかり、そのあと中野先生のお宅へ連れて行かれました。二階に上れと言われお座敷に通され、直ぐ酒盛りになりました。酒は三人とも強かつたが特に古屋さんが強かつた。私は酒を飲めなかつたが、飲む程に中野先生が変わつた盃を色々と見せて呉れびっくりしたが、何よりも驚いたのは学生と師範がこういう冗談をいいながら酒を汲みかわす間柄というものが理解できなかつた……」と当時を振返つておられ、ご自身が体験された厳しい修行時代と大きな距りがあつたことをまずあげられている。

四月合宿の春休みに初参加した時（山崎高や猪原が半ズボンをはいていた当時）、日吉の校舎の環境のよいのに驚いたものだった。これは面白い学校だと思つたり、練習が和気あいあいたる雰囲気であった事を覚えておられるそうであるが、塾の練習から日体へ帰ると、日体は道場の中では話しをしてもいかん、人の稽古を見てろという厳しい環境の中で育つたので、塾の和やかな空気の中から帰つてくるとかえつてホットしたものだ。どうも塾の道場は自分には場違いの感じだった、などと最初の頃を語つておられた。

長閑に和やかな空気の道場で、始めはびっくりされたようであるが、塾の柔道の良さもすぐにつかまれたようである。慶早戦の準備のため早稲田の練習を見、早稲田との柔道の相違を指摘され、寝技を練習させたものの、どうも塾

の柔道は寝技をやらせてる間は我慢してやつてゐるが、それから離れると投げたあとすぐに寝技に入つて行けば良いものをそれをやらなかつた。先生には、塾の柔道が技術の良いところを目標にして勝ち負けを度外視していたことをすぐ感じられたそうである。

当時の慶早戦が試合にならなかつた（それは場外に逃げる、又寝技に引き込むなど）そして戦前幾度かやつた慶早戦の意義があるのかとさえ思ったこと也有つたと云われる。立技と寝技、その極端な試合振りに色々あつたエピソードや、その結果講道館の審判規定が変わつた事など、さらにはその頃の懐しい人々の想い出などなど、ここで書きつくせない程であるが、紙数が尽きたのでまたの機会に改めてこれらの人々の想い出などを書きたいと思う。

（清水先生の師範就任は昭和十三年四月であるが、十二年度に適當な記事が得られなかつたので本年度に載せた。編者誌）

丙組の部									幹 師 部			
進級月次試合									事 範 長 役			
9 ○	8 ○	7 ○	6 ○	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○	近 ○	小 ○	熊 ○	古 ○
門 ○	門 ○	門 ○	門 ○	伊 ○	永 ○	水 ○	上 ○		飯 ○	柴 ○		
倉 ○	倉 ○	倉 ○	倉 ○	倉 ○	藤 ○	井 ○	野 ○	条 ○	藤 ○	西 ○	谷 ○	屋 ○
光 ○	正 ○	清 ○							塚 ○	田 ○		
四 ○												
夫 ○	郎 ○	寿 ○	明 ○	猛 ○					和 ○	喜 ○	幸 ○	正 ○
引 ○	扒 ○	扒 ○	合 ○	釣 ○	引 ○	引 ○	引 ○	巴 ○	三 ○	國 ○	一 ○	
分 ○	腰 ○	腰 ○	技 ○	腰 ○	分 ○	分 ○	分 ○	投 ○	漸 ○	夫 ○	德 ○	三 ○

○
城 金 猪 渡 那 門 伊 永 水
後 子 原 辺 須 倉 藤 井 野
重 達 恒 敏 恭 光 正 清
明 雄 雄 弘 一 夫 郎 寿 明

一月二十日

二級の部									三級の部				四級の部				
3 ○	2 ○	1 ○	7 ○	6 ○	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○	6 ○	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○	12 ○	
磯 ○	城 ○	城 ○	成 ○	成 ○	坂 ○	坂 ○	坂 ○	坂 ○	谷 ○	山 ○	山 ○	杉 ○	井 ○	横 ○	赤 ○	11 ○	
辺 ○	後 ○	後 ○	宮 ○	宮 ○	宮 ○	本 ○	本 ○	本 ○	本 ○	村 ○	崎 ○	崎 ○	本 ○	上 ○	田 ○	松 ○	10 ○
晃 ○	正 ○		誠 ○			英 ○	嘉 ○					正 ○	豊 ○				
平 ○	明 ○		一 ○			雄 ○	一 ○					高 ○	之 ○	明 ○	実 ○	栄 ○	三 ○

扒 ○ 引 ○ 扳 ○ 体 ○ 優 ○ 製 ○ 姿 ○ 内 ○ 内 ○ 内 ○
腰 ○ 分 ○ 腰 ○ 落 ○ 勢 ○ 固 ○ 股 ○ 股 ○ 股 ○ 股 ○
引 ○ 分 ○ 大 ○ 外 ○ 返 ○ 外 ○ 刈 ○ 小 ○ 内 ○ 刈 ○
引 ○ 分 ○ 外 ○ 刈 ○ 固 ○

○ 磯 ○ 中 ○ ○ 鈴 ○ 成 ○ 石 ○ 山 ○ 塞 ○ 坂 ○
崎 ○ 辺 ○ 沢 ○ 本 ○ 木 ○ 宮 ○ 川 ○ 崎 ○ 田 ○ 本 ○
正 ○ 晃 ○ 信 ○ 菅 ○ 康 ○ 誠 ○ 禧 ○ 門 ○ 羊 ○ 英 ○
彦 ○ 平 ○ 夫 ○ 吉 ○ 一 ○ 夫 ○ 次 ○ 三 ○ 雄 ○
○ 滿 ○ 篓 ○ 山 ○ 杉 ○ 井 ○ 橫 ○ ○ 大 ○ 柴 ○ 高 ○
谷 ○ 崎 ○ 本 ○ 上 ○ 田 ○ 俊 ○ 孝 ○ 正 ○ 豊 ○ 仁 ○ 豊 ○ 文 ○
吉 ○ 之 ○ 高 ○ 明 ○ 実 ○

丙組の部
5 4 3 2 1 ○
諸 室 伊 伊

橋 橋 伏 藤 藤
健 隆
勉 人 也

腰 大 足 優 引
投 外 判 扱 勢 分

○ 中 塚 ○ ○ 室 塚
島 本 橋 伏 本
太 健 太
勝 郎 勉 人 郎

無級の部

進級月次試合

記録なし。

卒業生送別紅白試合

一月三十一日(日)午後五時より

四月二十八日

平素の勉励と進級試合の結果進級せし者左の如し。
丙組へ 島 恵一
乙組へ 水野 明、永井清寿、伊藤正四郎、門倉光夫
四級へ 大島仁夫、柴田豊三
三級へ 坂本英雄、成宮誠一、松本善次郎、中野善正、満
二級へ 窪田羊三
一級へ 檜崎正彦
谷俊吉、篠崎孝之

甲組の部
1 ○ 中 島
3 2 1 高 城 中
大 島 後 島
木 島 文 重
雄 勝 勝

三級の部
5 4 3 2 1 ○
鈴 白 白 白 白
木 井 井 井 井
康 吉 伝 仁
高 文 明

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
山 山 杉 井 松 赤 赤 荒 石 大
崎 崎 本 上 村 松 松 松 木 渡 島
正 豊 英 仁
栄 茂 二 夫

四級の部
3 2 1
高 城 中
木 島 文 重
雄 勝 勝
引 分
扒 腰 固
大 内 判

山 山 西 大 篠	滝 田 ○ 山 杉 ○ ○ 松 大 荒 石 ○ ○	奥 ○ 高 城 後	那 須 恭 一
崎 崎 原 角 崎	沢 中 崎 本 上 村 大 松 木 渡	田 直 重	
門 正 輝 孝	貞 常 正 豊 泰 仁	英 雄 明	
次 典 雄 文	彦 司 高 文 明 二 夫 栄 茂 二		

二級の部 6 鈴木

○成金磯辺野信一
成宮宮晃壯平二

引弘腰分引跳腰優勢
分分分分

○谷村嘉一郎

坂本松金磯辺昭勝
善治郎本澤晃平二

副將西原
大將○山崎門次

副將○篠原恭敬

当日人員不足の為、幼年組紅白試合のみ行われ、有段者歓迎勝負は五月十一日に柔友会の新入部員歓迎会の前に行われた。

平素の勉励と月次勝負の結果進級せし者左の如し。

丙組へ塚本太郎、室内健人

乙組へ諸橋勉、中島勝

三級へ滝沢貞彦、山崎高、井上豊明、田中常司

二級へ山崎門次

進級月次試合

五月二十六日

無級の部

1 小沢幸三郎

大外刈

丙組の部

2 那須一

引分

乙組の部

1 中澤惣一

大外刈

○西篠滝杉井大小荒本山紅
原崎崎沢本上島林木村口
正孝貞正豊仁春
典之彦文明夫茂男

引 分 引 分 引 分 引 分
引 分 分 分 分 分 分

○松谷鈴中田赤石奥金
本村木野中崎松渡田子
善嘉康善常英直達
次郎吉正司高栄二道雄

五月九日 白

第四十七回 新入部員歓迎紅白試合

2 1 金山水口春男

引分 大外刈

○金子諸橋達勉雄

山那須恭男一
口春惣一

甲組の部																		
二級の部					三級の部					四級の部								
5	4	3	2	1	○	5	4	3	2	1	○	7	6	5	4	3	2	1
中小成山	山	井	西原	上		鈴	猿	木	崎	原	田	赤	松	大	野	村	奥	大
沢野宮崎	崎	上	木	崎	原	康	孝	正	豊	仁	田	松	村	島	村	村	村	外刈
信誠誠門	門	泰	吉	之	典	明				直	道	泰	仁	二	夫	吉	道	大外刈
夫一一次												栄	二	夫	吉	道	勉	
引分	引分	足分	引分	足分	払	合技	引分	送襟絞	大外刈	大外刈	大外刈	体落	優勢	優勢	絞技	優勢	合技	大外刈

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
磯 中成金	谷 鈴	滝 泷	西 原	荒 木	野 村	奥 田	直 道	奥 田	直 道	荒 木	野 村	奥 田	直 道	奥 田	直 道	奥 田	直 道	奥 田
辺沢野宮沢	村木	木崎	沢原	渡島	石村	大木	木村	元泰	茂栄	英仁	泰二	正一郎	正吉	正吉	正吉	正吉	正吉	正吉
晃信信誠壯	喜康	孝貞	正彦	英二	泰二	仁二	二郎	栄三郎	栄三郎	英二	泰二	茂栄	正吉	正吉	正吉	正吉	正吉	正吉
平夫一一二	一郎	吉之	典典	栄栄	泰泰	英英	二郎	栄栄	栄栄	英英	泰泰	茂栄	正吉	正吉	正吉	正吉	正吉	正吉

第九回東京学生連合軍対全滿州軍対抗柔道戦

於 大連忠靈塔市設仮道場

五月二十八日

この試合は両軍二十五名の選抜選士に依り、立錘の余地なくつめかけた観衆声援の内に午後四時開始された。塾からは田岡 協五段、古屋幸三四段、鳥海又六郎四段が出席、学連軍は大将、副将を残して前年の雪辱を遂げた。塾選士の戦況を当時の満州日々新聞から拾えよ……「先鋒より四番目の鳥海は真辺四段と引分。同七番目の古屋は起つや得意の右大外刈を放ち奥野四段脆くも倒る。次に迎えた松元四段も大外刈に打って取らんと気負つて掛けた大外を返され退く。六将田岡は先づ満軍の鬪将岩科

6 磯辺晃平 引分 磯原恭敬
7 ○鈴原恭敬 大外刈 坂本英男
平素の勉励と月次勝負の結果進級せし者左の如し。
丙組へ 小沢幸太郎、中沢惣一
乙組へ 那須恭一、山口春雄
甲組へ 金子達雄
四級へ 奥田直道 三級へ 秋元栄三郎、赤松栄
二級へ 西原正典、谷村嘉一郎 一級へ 鈴原恭敬

丙組へ 小沢幸太郎、中沢惣一

乙組へ 那須恭一、山口春雄

甲組へ 金子達雄

四級へ 奥田直道 三級へ 秋元栄三郎、赤松栄

二級へ 西原正典、谷村嘉一郎 一級へ 鈴原恭敬

五段を僅か四十五秒右内股の切れ味も見事に打つて取り、ここで両軍の戦勢併行となる、次の石崎五段も一分五秒鮮かな右内股に葬り、三人目村山五段に対す、村山左釣込腰に攻むるも動せず、田岡、機の熟するを待つて三度右内股一閃するや村山敢なく倒る。時間三分四秒なり、三人を打ち取られた満州軍は、四将中島五段を以て不振を一挙に挽回せんと、疲れ氣味の田岡を攻めて二分左内股に技有りを取つたが、田岡稽古充分一触逆転の攻防に両雄秘術の限りを尽し、タイム直前となるや中島の焦りに乘じ、突如！渾身の右内股を中島危く残してもたれ込み、強引に押え袈裟固めに極める。田岡の健闘、中島の奮戦に観衆沸きかえる。」

(満州日々新聞より)

本塾対國士館対抗試合

六月十二日(土)午後一時半より

先鋒	桑	久	留	原	和	田	本	塾	本	塾
(2)	彰	(2)	興	(2)	猶	徳	藏	(2)	塾	塾
引分	横四方	肩固	引分	先鋒						
○	○	○	○	○						
三	五	三	浦	浦	國	士	館			
浦	(3)	見	(3)							

毛	○	古	○	飛	○	鳥	三	○	熊	赤	近	始	始	小	羽	羽	羽	羽	菅	渡	木				
利	○	古	○	飛	○	鳥	三	○	熊	赤	近	始	始	小	羽	羽	羽	羽	井	会	下				
松	幸	常	又	守	喜														忠	良	助				
平	(4)	三	(4)	吉	(4)	亮	(3)	徳	(3)	豊	(3)	漸	(3)	源	和	治	(3)	夫	(3)	久	(3)				
引	跳	大	外	大	外	合	大	外	返	内	股	崩	上	方	引	背	負	投	引	分	大	内			
分	腰																			内	刈	小	内		
																				刈	達	腰	大		
																				助	(3)	引	外		
石	細	○	田	○	田	中	岩	○	岩	土	○	野	市	○	市	○	市	○	上	○	上	○	川	佐	
川	川	(4)	川	(4)	淵	(4)	淵	(4)	村	崎	(4)	居	(4)	村	(4)	原	(3)	原	(3)	野	(3)	野	(3)	川	藤

進級月次試合									
無級の部					有級の部				
乙組の部					丙組の部				
5	4	3	2	1	2	1	○	清	水
⊖	中	山	伊	門	成	矢	金	子	達
島	口	藤	倉	沢	清	沢	卓	緒	三
春	忠	光	惣	慶	喜	喜	治		
勝	男	雄	夫	一	八				

副將○田岡	協(5)
大將○侯野	清(5)
侯野	引分
大將○侯野	大内刈
大内刈	副將
副將	石緒
石緒	方(4)
方(4)	飛(4)
飛(4)	玉城(4)
玉城(4)	城(4)
城(4)	中村(4)
中村(4)	引分
引分	大將
大將	中
中	村
村	先輩多數臨席あり。好試合が展開され盛大裡に閉会し

進級月次試合

六月二十四日

六月二十四日
諸 中 山 伊 門 中 渡 成 矢 金 境
橋 島 口 藤 倉 沢 辺 清 沢 子
春 忠 光 惣 敏 慶 喜 卓
勉 勝 男 雄 夫 一 弘 三 八 治 顯

内 内 引 引 内 内 引 大 外 刃 引 引 内 内 大 外 刃 翡 翡 固 翡 翡 固
股 股 分 分 股 股 分 分 股 分 分 股 合 技 一 本 背 腰 鈞 達 腰 翡 翡 固

○小野信一

内股

○小野信一

新旧部長送迎紅白試合

九月二十五日

7 成宮	8 小野信一	引分	○小野信一
9 磯辺晃平	松本善治郎	足払返	○金沢壯二
10 松本善治郎			松本善次郎

平素の勉励と月次勝負の結果進級せし者左の如し。

丙組へ 清水達雄、境

頭、金子卓治、矢沢貢八

乙組へ 成清慶三

三級へ 杉本正文

二級へ 鈴木康吉

一級へ 磯辺晃平

新旧部長に対する祝賀と謝恩の微意を捧げるための大會を開催した。大会は送迎の式に始まり紅白試合及古屋幸三四段及岡崎俊祐五段の七人掛が盛大に行われた。送迎の式は開会の辞、送別の辞、歓迎の辞と幹事より述べられ、続いて先輩代表、飯塚師範、板倉体育会会长の挨拶の後、柴田前部長及橋本新部長より各自送別と幹事の辞があり、柴田部長に記念品が贈呈された。

式次第

一、開会之辭

一、歓迎之辭（幹事）

一、師範の挨拶

一、柴田先生挨拶

一、記念品贈呈

一、送別之辭（幹事）

一、先輩の挨拶

一、体育会会长挨拶

一、橋本先生挨拶（病氣欠席代読）

一、閉会之辭

大正十年部長に御就任以来、塾柔道部中興の業を担
い、講談師よろしき訓示を以て部員に親しまれ今まで
吾々を指導して来られた柴田一能先生には日蓮宗管長に
御榮進のため勇退されることになり、新に橋本孝先生を
部長に御迎えすることとなつた。橋本新部長は文学教授
で普通部主任、文学部長を歴任、体育会最古の歴史と輝
かしい伝統を有する塾柔道部の新部長に就任された。

部長の更迭

紅白試合

大將 副將 先鋒
 坂 小 西 西 松 山 山 山 山 滝 井 野 野 石 石 荒 奥 奥 室
 本 野 原 原 本 崎 崎 崎 崎 沢 上 村 村 村 渡 渡 木 木 田 田 伏
 英 信 正 善 治 貞 豊 正 英 英 直 健
 男 一 典 郎 高 彦 明 吉 二 二 茂 道 人

引 分 足 合 引 扱 大 合 大 外 内 引 引 合 合 絞 合 引 崩 橫 四 方 先 鋒 ○
 扱 技 分 腰 外 剣 技 剣 股 分 技 技 技 技 分 製 婆 固

大將 副將 先鋒
 成 成 白 白 内 山 谷 田 杉 杉 石 中 橫 橫 松 松 大 高 金 金
 宮 宮 井 井 海 崎 村 中 本 本 川 野 田 田 村 村 島 木 子 子
 誠 伝 昭 門 嘉 常 一 正 礼 善 泰 仁 慶 三 達 雄
 一 仁 勝 次 郎 司 之 夫 正 実 二 夫 郎 雄

平素の勉励と月次勝負の結果進級せる者左の如し。	四級へ 三級へ 一級へ 成宮誠一	野村正吉、松村泰一、荒木茂 白井伝仁、田中常司、滝沢貞彦	七人掛全勝	七人掛全勝	七人掛全勝
			五段 岡崎 俊祐	四段 古屋 幸三	三段 関峰 木 笹 川 石 中
			○大内返 押込 逆合 技内股 大外返	○大外刈 鈎足 大外刈 大外刈	○跳腰 大外刈 大外刈
			大将 副將	大将 副將	先鋒
			始 関 笹 川 石 渡 島	良 間 越 渡 辺 田	岸 下 間 越 渡 村
			源 猶 一 頤 徹 房	治 準 興 男 一 夫 蔵	豊 三八郎 雄 猶 一 頤 雄
					準 雄 興 男 一二

進級月次試合

三級の部			四級の部			甲組の部			乙組の部			無級の部		
4	3	2	1	3	2	1	3	2	○	城	成	2	1	○
中	松	○	松	赤	石	大	奥	城	○	城	諸	金	円	川
野	村	村	松	渡	島	田	後	後	清	慶	橋	子	谷	内
善	泰			英	仁	直			重	慶	卓	和	達	正
正		二	榮	二	夫	道			明	三	勉	治	夫	猪

紹
技
一本背負
大外返
背負投
優 優 扱
勢 勢 腰
引 分
製姿固
大外刈
大外刈
引 分
引 分
引 分
合 技

十月二十日

一級へ 小野信一、内海昭勝
第四十七回秋季大会

紅

○ ○ 西	金 窪	石 石	赤 荒	荒 荒	荒 荒	奥 奥	成 川	伊 中	高 橋
西 西	原 原	原 原	沢 田	川 川	松 木	木 木	木 木	田 田	藤 清
正 壮 羊 祇							内 内	中 沢	橋 隆
典 二 三 夫 栄							内 内	中 沢	正 隆
茂 道 三 充 也							内 内	中 沢	也 雄

押 押	大 外 戰	跳 腰	引 分	大 内 戰	内 股	大 外 戰	跳 腰	小 内 戰	体 落	足 扯	引 分	合 技	引 分	引 分
込 达												袈 姿 固		

先鋒

白

○ 近 児 中 杉 杉	○ ○ 大 大 山 小 金 門 上 上 円 金 ○	○ 和 田 子 子 子 子 子 子
藤 玉 沢 本 本	本 本 島 島 島 岡 林 子 倉 篠 谷 子	田 一 信 正 仁 嘉 重 達 光 和 卓 弘
肇 男 夫 文	夫 文 夫 也 太 雄 夫 猛 夫	治 弘

十一月三日

笠 原 慶太郎
 初 副將 ○ 久木田 辰吉
 久 木 田

引 分
 大 外 戰

近 藤
 副將 ○ 五十嵐 正

夫

俊

創

平素の勉励と紅白勝負の結果進級せし者左の如し。
 丙組へ 伊藤隆也、和田弘、高橋正雄
 乙組へ 金子卓治
 三級へ 神谷伝八郎
 一級へ 山崎高、金沢壯一、西原正典
 二級へ 秋元栄三郎、杉本正之

進級月次試合

十一月二十五日

乙組の部	丙組の部	無級の部
1 ○ 成 川 室 二 二	1 ○ 二 二 二 二	1 小 泉 清 一
清 慶 正 建 雅 男	内 伏 瓶 瓶 瓶 瓶	雅 男 一
三 充 人 男		

優勢	大 外 戰	引 分	背 负 投	釣 込 腰	合 技	釣 込 腰	釣 込 腰
----	-------	-----	-------	-------	-----	-------	-------

金 子 卓 治	○ 成 川 室 清 水	○ 清 水	山 高 橋 正 雄	二 瓶 雅 男
	清 内 伏 建 達		中 智 成	雅 男
	慶 正 建 猪		雄	
	三 充 人 猪			

三級の部										四級の部									
3 ○ 横	2 石	1 山	13 ○ 奥	12 内	11 樺	10 城	9 国	8 森	7 ○ 森	6 森	5 志	4 志	3 ○ 志	2 井	1 井	5 円	4 渡	3 上	2 成
田 渡 田	田 海	後 東	岡 岡	岡 岡	岡 岡	志保 沢	志保 沢	志保 沢	志保 沢	志保 沢	志保 沢	志保 沢	志保 沢	閔 閔	閔 閔	谷 谷	辺 辺	篠 篠	清 清
英 嘉	直 敏	朱												忠		和 和	敏 敏		
実 二 也	道 勝	明	茂											世	仁	弘 弘	猛 猛		
返 引 小 内 刈	大 外 返	引 分	引 分	引 分	引 分	引 分	大 外 刈	弘 腰	引 分	義 密 固	引 分	合 合 技							

荒 横 石 鈴 奥 内 椿 城 ○ 塩 小 森 谷 村 ○ 志 保 谷 ○ 金 円 ○ 渡 上
木 田 渡 木 田 海 後 東 山 田 岡 村 松 沢 村 子 谷 辺 篠
英 正 直 敏 朱 重 賢 国 一 健 忠 国 三 郎 達 和 敏
茂 実 二 久 道 勝 明 明 茂 豊 博 郎 郎 吉 也 雄 夫 弘 猛

追補

清寧館武道大会

五月十五日

恒例の武道大会へ本塾より田岡五段（勝）赤塚四段（勝）羽鳥四段（判定負）が出場した。

青年演武大会

七月三十日

京都武徳会に於て挙行、本塾予科チーム（出場二十チ一ム、）は武徳会、和歌山、武徳会大阪支部に勝ち決勝に進んだが一対〇で東京鉄道軍に惜敗した。

本塾予科

0 | 1

東 鉄

赤 塚	引 分	村 上
羽 鳥	○ 菊 池	工 藤
飛 田	引 分	姿 川
田 岡	引 分	宮 川
侯 野		

本塾予科対横浜専門学校対抗試合

十一月九日 於 綱町道場

各十五名の勝抜戦で、本塾赤塚四段、飛田四段、侯野五段の活躍目覚しく四名を残して勝つ（試合記録なし）

東京学生聯盟リーグ（予科高専の部）

十一月二十八日 於 法政大学

本塾は田岡(5)、飛田(4)、羽鳥(4)、赤塚(4)、和田(3)、渡会(3)（侯野(5)は対早稲田のみ出場）のメンバーで出場、決勝で早稲田を一対〇に降し優勝した。